

言語学者としての石黒先生， 教育者としての石黒先生を語る 石黒昭博先生のご退職に際して

中 井 悟

石黒昭博先生が2003年3月末をもって同志社大学を定年退職された。本来ならば1999年3月をもって定年退職されるはずであったが，大学院担当教授として，英文学科から請われて定年延長をされていたのであるが，これもまた請われて，2003年4月から徳島文理大学へ移られ，文学部長の重責を果たしておられる。もう一年定年延長をして英文学科の大学院で教えていただくはずであったが，仕方のないことである。

石黒先生は，1934年1月7日生まれで，生粋の大阪人であると聞いている。卒業された高校は大阪市立高等学校である。普通は，京都市立紫野高等学校とか名称がついているものであるが，単に大阪市立高等学校という。大阪市立大学があるのであるから，大阪市立高等学校があっても不思議ではないが。

1952年に大阪市立高等学校を卒業され，同志社大学文学部英文学科へ入学された。先生の学部生時代の話はあまり聞いたことがない。ただ，学部生のころからお酒はお好きであったようで，コンパの席で立命館大学の学生達と争ったことがあるという話は聞いたことがある。

1956年に大学を卒業され，母校である大阪市立高等学校に英語教師として赴任された。5年間ほどその高校で教えられていたが，学問への志が高く，1961年に同志社大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程に入学された。大学院での成績も優秀で，1963年に大学院を修了されると同時に同志社大学文学部の助手になられた。修士論文のテーマは，A Descriptive-Comparative

Study of English and Japanese: Basic Statement Patterns で、指導教授は、岩倉 具実教授であった。

先生は、1964年から1966年にかけて米国のオハイオ州立大学(Ohio State University)の言語学科に留学され、MAの学位を取得されている。当時のオハイオ州立大学の言語学科には、Charles Fillmore, Terence Langendoen, William Wangといったそうそうたる言語学者があり、先生はFillmoreの指導で、A Study of Japanese Verb Phrase Embedding Constructions というテーマで修士論文を執筆された。(後に、先生は、この論文の一部を改訂されて *Doshisha Literature* に発表された。) Fillmoreは当時新進の生成文法学者で、後に格文法(Case Grammar)を提唱し、著名となった言語学者である。先生は、日本に帰国された後も今でも Fillmore 教授と Wang 教授とは親交があり、Fillmore教授も Wang教授も同志社大学に来られて講演をされたことがある。このような世界的に著名な言語学者の講演を間近で聴くことができたのも先生のおかげである。

生成文法は、Noam Chomskyが提唱した言語理論であり、先生がオハイオ州立大学に留学されていた1960年代には構造主義言語学と激しい覇権争いをしていただころである。先生は、先見の明があったのであろう、これから言語学界の主流になろうとしている生成文法を身につけて帰国され、同志社大学で学生達に生成文法を紹介された。かくいう私も、先生から生成文法を紹介され、生成文法の魅力にとりつかれ、生成文法の研究を生業とする身になったのである。当時、日本人で生成文法を研究している人はほんのわずかであり、先生は日本における生成文法家の草分けである。

したがって、米国留学から帰国後の先生の研究は生成文法が中心である。発表された論文を見るとそのことがよくわかる。たとえば、

1967年5月 「目的語構文とwith変形」『人文学』第95号(同志社大学人文学会)

1968年5月 “Japanese Passive and Causative Constructions”『人文学』第100

号（同志社大学人文学会）

1969年2月 “A Study of Japanese Verb Phrase Embedding Constructions,”
Doshisha Literature, No. 25（同志社大学英文学会）

1971年9月 「日本語助詞学習上の干渉について：深層構造と対照文法の一
面」『言語学と日本語問題』（岩倉具実教授退職記念論文集）くろしお出版）

1974年6月 「ヨブ記の散文について：生成文体論の試みとして」『主流』
第36号（同志社大学英文学会）

1992年に、先生はそれまでの研究を集大成された、*The Notion of Subject in Modern English*という博士論文を同志社大学に提出され、同志社大学から博士（英文学）を授与されている。これは近代英語における主語の概念を、格文法(Case Grammar)、認知文法(Cognitive Grammar)、機能文法(Functional Grammar)などの観点から詳細に検討したもので、翌1993年に南雲堂から出版された。格文法は先生の師である Fillmore が提唱した文法理論であるが、先生は格文法だけではなく、認知文法や機能文法といった生成文法以外の文法理論の観点からも主語の研究をされている。先生の研究の幅広さを証明するものである。

1974年の論文のタイトルに「文体論」という言葉が出てくるが、先生は生成文法に足場を置きながらも、意味論や文体論など、次第に研究領域を拡げられたのである。生成文法一本槍という人もよく見かけるが、先生は生成文法の意義とその限界を見極め、生成文法以外の領域へと関心を拡げられたのである。そのことは、先生が日本比較文化学会の副会長や表現学会の理事を務められたことでもよくわかる。

先生は、言語学者としても多大の業績があるが、教育者としての功績も忘れることができない。先生は1970年に最初の「特殊研究」、いわゆるゼミを持たれた。その石黒ゼミの第一期生はわずか男子5名、女子3名であったが、男子5名のうち、3名が現在大学で言語学を教えている。その後も石黒ゼミからは多くの言語学者が育っており、全国の大学で言語学を教えている。石

黒ゼミには属さなかったが、石黒門下生として活躍している言語学者もいる。先生が教育者として尊敬されていることは、先生のために教え子達による2冊の論文集が出版され、また、出版されようとしていることが物語っている。1冊目は、1994年に英宝社から出版された還暦記念論文集（『ことばの樹海 石黒昭博先生還暦記念論文集』）であり、2冊目は、現在、編集作業が進んでおり、2004年（当初、先生が同志社大学を定年退職されるはずであった年）に出版される予定の古希記念論文集である。

先生を語る上で忘れてはいけなことが一つある。それは、先生はお酒が大好きであるということである。教授会の後に、「君、ちょっと行こう」といわれて飲みに誘われたことがある人は大勢いる。会議の終了時刻によっては、まだまだ明るいうちから飲みに行かれることもしばしばであった。夜の授業がある時も、授業前には食事を取らず、空腹を我慢して授業をし、授業が終わるやいなや木屋町や先斗町に駆けつけるという具合であった。

これは言語学者としては当たり前のことである。言語学者は皆酒飲みである。（酒飲みでないと言語学者になれないということではない。every grammar leaksというように、ものごとには例外がある。あのChomskyはほとんどお酒を飲まないということである。）私自身、米国の大学の言語学科に留学中に、著名な言語学者がよくビールを飲んでいるのを見て安心したことがある。9月に新学期が始まると、Grand Openingと称して、学科のオフィスのロビーで教員と院生が集まってビアパーティを開くのが習わしであった。ワインを飲みながら授業をしたこともある。（たしかElisabeth Selkirkのフランス語の統語論のセミナーであった。）

しかし、先生は泥酔するほどの酒飲みではない。必ず最終の阪急電車の急行で住んでおられる茨木まで帰ることにされているようである。ただ、一晩に何件もの店を移られるのが特徴である。一軒の店に長居はされないのである。ある店に入られても、少し飲んだだけで、すぐに「さあ、次へ行こう」といって店を変えられるのである。かつて、私は、先生に向かって、「ウイス

キーの空き瓶で家が建ちますね」と冗談を言ったことがある。多分、これまでに先生が空けられた酒瓶を積み上げれば小さな家が立つのは間違いない。さすがに、最近健康のことを考えられて若いときのように飲まれないようであるが。